

# 「おはよう」の朝に思うこと

宮里 暁美



「おはよう！」幼稚園の扉が開く。勢い込んで子どもたちが中に入ってくる。笑顔がはじける。朝

の光を受けて、幼稚園が一気に輝きを増す瞬間。

幼稚園の一日は、こうして始まります。

元氣いっぱいの子どもたちに声をかけて、玄関で出迎える毎日。同じ繰り返しのように見えて、実はいつも違うドラマが展開されている「おはよう！」の時間。そこで出会ったことについて振り返りながら、「あいさつ」から見えることについて考えていきたいと思います。

「おはよう」が変わる

朝、戸口の所で一人ひとりを出迎えていると、お母さんと手をつないでAちゃんがやってきました。目と目が合って「おはよう！」と言葉を交わしたそのとき、以前とは何かが違う！ という思いに包まれました。何が？ と思ったその瞬間、前日、チャボ小屋の所でAちゃんと出会ったときのことかよみがえってきました。

Aちゃんは、チャボの卵を手に持っていました

( 特 集 )

た。一緒にいた先生が「Aちゃん、勇気を出して卵を取りに行ったのよね！初めてやってみたのよね！」と声を弾ませて教えてくれました。

チャボ小屋に入り、奥の方にある卵を取って行くのは、二羽のチャボがつつきに来るのを避けながら素早く行動しなくてはならず、なかなか難しいことなのです。初めてやってみた興奮から顔を赤くしているAちゃんに、「すごいねえ。ドキドキしたでしょ」と声をかけた私に、Aちゃんは笑顔返してくれました。

そのようなことが、一瞬のうちに私の中によみがえりました。そしてAちゃんと私のその日の「おはよう」の言葉の奥には、へチャボの卵を取ってくる事ができたのはすごかったよね！という気持ちの行き来が確かにあったように思えました。

一八〇組近い親子と出会う朝は、初めのうちは、目が回るようなひと時でした。次々に出会い

次々に先に進んでいく。そのことに圧倒されそうになります。いくら心を込めて「おはよう」を言おうとしても、形だけになってしまうのは仕方ないことかもしれないという思いにもなりがちです。でも、Aちゃんの「おはよう」が教えてくれました。

「おはよう」という言葉で出会う、この朝の瞬間は、前日の楽しさや喜びとこれから始まることへの期待をつなく、とても素敵な瞬間なのです。

子どもたちは、どのような体験してきたのでしょうか。そして新しい一日の中でどのような体験をしていくのでしょうか。それらをすべて知ることなど、とうてい無理なことはわかっています。けれど、子どもの笑顔の理由や、弾むように駆けていくその先へと、思いを向けることはできるはずです。

「たくさん遊ぼうね」「何が始まるかな」そんな

期待に包まれながら、子どもたちに「おはよう」という言葉をかけること、そして、子どもたちの「おはよう」に耳をすませることが大切なのだと思います。

### 早過ぎた「おはよう」

あるとき、Kちゃんのお母さんから「Kがあいさつするのを、ゆっくり待っていてくれますか」とお願いされました。自分としてはKちゃんの言葉をいつも待っていたつもりなので、お母さんのひと言に少し驚きながらも、お母さんの言葉を受け止めることにしました。そして、Kちゃんの顔を優しく見つめながら、Kちゃんが話し始めるのを待つことにしたのです。

すると、Kちゃんは、にっこり笑って大きな声で「おはようございます」と言いました。私も同じように笑顔で「おはようございます」と応えま

した。お母さんは、そんな二人のやりとりをうれしそうに聞いていました。

お母さんと一緒に保育室へと向かうKちゃんを見送りながら、何が違っていったのだろうと考えました。その疑問を抱いたまま保育が終わるのを待ち、Kちゃんの担任にこのことを話しました。すると担任は「Kちゃんは、少し発音がはっきりしない傾向があつて、お母さんは、それを気にしているのですよ。それで、そのように言つたのかもありませんね」と教えてくれました。

私は、あいさつは言われたから返すというのではなくて互いに交わすものであり、まず自分から気持ちのよいあいさつをしようと考えていました。そのため、自分から先に声をかけることも多かつたように思います。

いつも大きな声で「おはようございます」と言つてくれるKちゃんに対して、明るくあいさつ

を返したり、時には自分が先に「おはようございます」と声をかけたりしながら、楽しくあいさつを交わしている、と私は思っていたのでした。

ところが、このことがKちゃんのお母さんに見たら、何かせかされているような印象になったのかもしれないと、お母さんのひと言をかみしめながら思いました。

子どもたちも保護者もいろいろな思いを抱いています。それぞれの思いを大切にしながら、もう一度丁寧な気持ちで一人ひとりの「おはよう」の言葉をしっかりと受け止めていこう、と思ったのでした。

日々変わっていく「おはよう」

五歳のSちゃんは、一学期、なかなかお母さんと別れることができませんでした。「おはようございます」までは順調に言えるのですが、お母さん

んと手を離し廊下に歩みを進める、その一歩がどうしても踏み出すことができないのです。

「ねえ、お迎え来てね」「絶対来てね」とお母さんに繰り返す言うSちゃん。お迎えに来ないはずのないお母さんは少し困ったような顔で「来るわよ。大丈夫よ」と優しく応えますが、それでも別れることができません。

担任が玄関まで迎えに来たり、お母さんが保育室までSちゃんを連れて行ったりすることもありました。保育室に行きさえすれば、お母さんが帰っても気にすることなく楽しく遊べるのです。

そんなやりとりを、私は毎日背中で聞いていました。うまくタイミングが合って、一緒に保育室まで行く、というかわりをしたこともありました。

お母さんと別れ難いSちゃんの朝は二学期になっても続き、いつまで続くのかしらと思ってい

たところに、突然転機がやってきました。

九月中旬のある朝、Sちゃんは「おはようございます」とあいさつした後、ほんの少し躊躇し、そして意を決したようにお母さんの手を離しました。そして一歩を踏み出したのです。それは、とても静かな、しかし力強い一歩でした。

振り向きもせず歩いていくSちゃんの背中を見つめているお母さんと私。でも、Sちゃんは、一度も振り向くことはありませんでした。

お母さんやお父さんと手をつなぎ「おはよう」と言う、それは始まりのあいさつであると同時に、別れのあいさつでもあります。

五歳の子どもたちは玄関口で保護者と別れるので、つないだ手を離し保育室へと向かいます。三歳や四歳の子どもたちは、保育室前まで保護者と一緒に行くので、そのまま手をつないで歩いていきます。それでも、もうすぐ別れることになる、

ということがわかっていいるからでしょうか、つないだ手に力が入っているのがわかります。

つないだ手を離し歩きだす瞬間、「行ってきます!」「行ってらっしゃい! 元気で遊ぶのよ!」という声にならない思いが飛び交っているように感じられます。中には、Bちゃんのように「もう少し一緒にいて」というつぶやきも聞こえます。寄り添ったり、突き放したり、そしてゆっくり待ったり、いろいろな親子模様がそこに見えます。

出会いと別れが交差する場所に立ちながら子どもたちを見ていると、社会へと向かっていく、はじめの一歩を踏み出しているのだと思えてくるのです。

それぞれの「おはよう!」

帰りの支度をしていた三歳のRちゃんに「あし

( 特集 )

たもまたいっぱい遊ぼうね」と話しかけると、「お休みするかもしれないよ」という答えが返ってきました。「Rちゃんが来なかったら寂しいな。先生Rちゃんにおはようって言うのを楽しみに待っているね」と話しかけると、少し考えたRちゃんから「うーん、でも僕、朝は機嫌悪いと思うよ」という答えが返ってきました。私は、Rちゃんのひと言に驚きました。自分の過去の「おはよう」という時間を振り返り、未来の「おはよう」を考えているのです。

次の朝、お父さんに手を引かれてやってきたRちゃんは、確かに機嫌が悪そうでした。私は予告されているので、それがまたかわいくて、笑顔で「おはよう」と声をかけました。

そんなRちゃんですが、もちろん機嫌のよいときには、靴箱の所から大きな声で、「オーイ、おはよう！」と声をかけてくれることもあります。

機嫌が悪かったり、元気いっぱいあいさつをしたり、毎日違うRちゃんに出会えるのがとても楽しみです。

たった一つのあいさつ「おはよう」の中からも、こんなにたくさんのお話が見えました。

『あいさつ』、それはドアをノックする行為に似ています。ノックに応えてドアを開けたときから、もう物語は始まっています。あるいは、ノックしながら子ども自身が扉を開けているのかもしれないません。

保育者もまた同じです。毎日子どもたちとあいさつを交わし、新しい一日を始めていくときに、子どもを心をつかりノックすること、扉をさわやかな気持ちで開けることが、とても大切なのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)